

## 準拠集団の機能とそれらが自己認識欲求に与える効果について

平沢 尚孝\*・田島 司\*\*

(平成11年9月29日受理)

### Functions of Reference Group and It's Effects on the Need for Self-recognition

Naotaka HIRASAWA and Tsukasa TAJIMA

(Received on September 29, 1999)

#### 問 題

##### 自己認識欲求の位置づけ

社会との関わりの中で自己が認識される過程について古くから多くの研究が行われている。それらの議論では明確にもしくは暗黙の内に、自己が社会的に妥当な存在であることを求め、そのように認識しようと動機づけられていることを前提としているようである。例えば Festinger (1950) の議論には、自己の意見、態度、信念が何らかの真実性の基に妥当でありたいという動機が存在が前提にあると思われるし、後の社会的比較過程理論では、自己の能力についても評価しようとする動因が存在することを仮定している (Festinger, 1954)。また、これらの議論では、人は物理的な環境の中だけで生活しているのではなく、人が適応すべき環境には主体的な存在である他者との関係を含んでいるため、ほとんどの場合には他者との関わりの中で自己を認識することが仮定されている。Tesser & Campbell (1982) の自己評価維持モデルでは、他者との関係が自己評価に重要な影響を与えることと、その中で肯定的な自己評価を維持しようと動機づけられていることが仮定されている。いずれにおいても、社会的環境で自己を認識することによって、単なる知識ではなく、妥当性、協和的状态などの評価的次元を含んで認識される過程を扱っているといえよう。これらの視点をふまえて上瀬 (1992) は、人は自己を認識しようとして自己に関する様々な情報を収集しようとすることを指摘し、そのような行動を生じさせる構成概

念を自己認識欲求とよんだ。さらにそれを測定する尺度を作成している。今回の研究でも、人は社会的環境の中で自己を妥当なものとして認識しようと動機づけられていることを前提とする。その自己認識欲求が社会との関わりによっていかに喚起され充足されるのか、それに関わるとされる準拠集団の機能について検討する。

自己認識についてのこれまでの研究には、状況によって刻々と変化する自己の側面を捉えて議論しているものがある。例えば R. H. Turner (1968) の「自己イメージ (self image)」や Alexander & Knight (1971) の「状況的アイデンティティ (situated identity)」, Markus & Kunda (1986) の「作動自己概念 (working self-concept)」などの概念があげられる。しかし上瀬 (1992) の仮定する自己認識欲求とは、測定される状況を特定せず、むしろ、ある程度長期的な自己認識に関わるものと思われる。

短期的な状況の変化にあまり左右されずに、ある程度長期的な安定性をもって自己を認識することの必要性がこれまでに主張されている。例えば Erikson (1959) や Baumeister (1986) は、自己の認識には時間的な連続性、又は一貫性という感覚が伴うことが必要であることを指摘している。それが達成されない場合には生き生きとした現実感を失ったり、親密な人間関係の形成に支障をきたすことさえあると考えられている。長期的な自己認識の安定性が重要であるとするこれらの議論からも、自己認識欲求の喚起、充足を規定する条件やその機制に注目する意義があると思われる。

\* 国際コミュニケーション科 心理学研究室

\*\* 教職教養科 非常勤講師

準拠集団との関わり

自己認識の一つの源泉は、自己にとって重要な他者か

らの情報であろう。そのような他者とは、すなわち準拠集団を構成する成員である。準拠集団とは、心理的に自己に関連づけているもしくは関連づけたいと願う集団であり (Sherif & Sherif, 1969), 自分自身に関連づけることによって、自己の態度、判断、評価、意識の形成と変容に影響をうける集団のことである (船津, 1975)。従って自己認識に必要な情報を得るためには、少なくとも身近な他者と準拠集団を形成し、そこに自己に関連づけている必要があるだろう。

人は、自己の意見、態度、信念などの妥当性を評価する際には重要な他者のそれを基準とし、自己との類同や認知された類似性によって社会的真実性を得ることができる。Festinger (1950, 1954) が用いる社会的真実性という概念は、環境に実際に働きかけることで得られる客観的真実性とは異なり、単に自己にとって重要な他者と類似することで妥当性の基礎を得るものである。他者が自己と同じ意見や態度を持っている限りにおいて、それは自己にとって妥当なものであり協和な状態で認識されると考えられている。そのことから、準拠集団内の他者が自己認識を安定させる可能性をもつのである。Swann & Predmore (1985) の実験では、重要な他者からの情報が自己認識の変化や安定性に大きく影響することが示されている。被験者はTATの図版を見てストーリーを創作し、実験者による人格テストの分析結果として自己概念に反する情報を受け取る。その後、自己概念と一致しない、すなわち人格テスト結果と一致した評価をもつ親密な他者や親密でない他者と相互作用することによって、被験者は自己概念の評定を実験前から変容させたが、自己概念と一致する評価をもつ親密な他者と相互作用した場合には自己評価は実験前から維持されていた。

しかし、単に準拠集団が形成されているというだけで、自己認識は長期的に安定するのだろうか。大西・鈴木・繁樹 (1993) は、事象間が類似しているか否かを判断する際の次元は、状況に依存して決定されていることを指摘した。言い換えれば、課題が設定されず重要な次元を特定できない状況では、事象間の多数の類似と非類似が氾濫してしまうことになる。もしも準拠集団内で重要な目標や課題が共有されておらず、環境に対する働きかけの対象が明確でない場合には、注目すべき安定した次元が特定されないことになってしまうかも知れない。先述したように、人は妥当な自己を認識しようと動機づけら

れているとすれば、危急性のある課題が存在しなくても、社会一般で用いられている比較的重要な評価次元で自己を認識することは可能である。しかしその場合の評価次元は準拠集団内で決定的な意義を持ち続け、実体性のある自己を認識させ、欲求を充足させるに足るのか、という疑問が生じるのである。

一方、自己認識のもう一つの源泉は、自己が環境に対して具体的に働きかけた結果、つまり何らかの課題を遂行することで環境から返される情報であろう。Festinger (1950, 1954) が、自己の妥当性を知る際の手がかりとして優先されると考えていた客観的真実性とは、まさにこの過程で得られるものである。環境に働きかけ、その結果を得ることで客観的な基準が設定されると、それは第三者からも評価できるものになり、客観的真実性に基づく妥当性として自己認識に重要な影響を与えると思われる。

ただし、自己を客体として認識させるための課題は、他者と共有されることで初めてその機能を果たすとの指摘は古くからある。Mead (1913, 船津・徳川訳, 1991) は、人が自分自身にとっての対象として意識されるのは、環境に向けられたすべての行為によってではなく、他者に対する働きかけが自分自身の内にも反応を引き起こすという過程で生じると述べている。言い換えれば、環境への行為のなかでも自己に反応し得る他者がその環境に含まれる場合に、環境での働きかけの過程で他者の役割を取得することによって初めて自己を意識することができるのである。さらにこのような過程は、自他が、ある準備された行動の完結形に向かって相互に影響し合うコミュニケーションの中で生じるという (Mead, 1934, 稲葉・滝沢・中野訳, 1974)。つまり、他者と目標を共有し達成すべき課題を遂行する中での相互影響過程を通して、結果的に他者と自己をともに認識させるのである。従って、他者と同一の目標に向かって課題を共有することが必要である。そこで認識される社会的な対象としての自己を Mead (1913, 1934) は特に “me” とよび、Stone (1962) はそれを、社会的関係における自己の位置づけを示す「アイデンティティ」とほぼ同義に扱っている。その後の Burke (1980) や McCall (1987) などが定義する「アイデンティティ」も、役割関係に含まれる自己の意味づけと、対峙する役割を担う他者との関係性を重視している点から同様の概念を扱っていると思われる。いずれも社会的環境での課題遂行過程で認識される

と考えられている。

他者との課題遂行関係の中で生じた自己と役割との一体化が、当該の役割関係を離れた状況においても持続、汎用され得るとの指摘がある (R. H. Turner, 1978)。例えば、ある職業に特有の評価基準や行動傾向などが、汎用に適当でない職場以外の状況においても維持されてしまうなどの場合である。R. H. Turner (1968) が「自己観念 (self conception)」とよぶこの側面は相対的に長期間持続し、短期的な状況にも左右されにくいと考えられている。だとすれば、準拠集団での課題遂行過程で得られる自己認識内容は、ある程度状況に左右されずに安定して、自己認識欲求を充足させるとも考えられるのではないだろうか。

このような議論をふまえて、以下では次の二つの点について調査、検討する。一つ目は、準拠集団が存在し、それに自己を関連づけていることが、自己認識欲求の程度にどのような影響を及ぼすかである。二つ目には、その集団内で課題遂行することが自己認識欲求の程度に与える影響である。

## 方 法

**調査対象者** 東京家政大学短期大学の学生、女性 69名。

**調査内容** 調査は心理学の授業中に行い、人格テストの一種であると説明のうえ質問紙を配布した。質問紙では最初に上瀬 (1992) の自己認識欲求尺度である 14 項目に回答させた。回答は「非常によく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの 5 段階尺度である。

次に準拠集団への関連づけを測定するため、家族と大学の友人 (全員が含まれている学科の友人を想起させた) についてそれぞれ 2 種類の質問群によって測定した。その一つは、心理的に自己を内集団に関連づけている程度を測定する 3 項目であり、具体的には「自分は……の一員だと度々意識する」「自分の……のことを他の人によく話す」「自分にとって……に所属することは重要である」である。もう一つは「人格テスト」(実際には自己認識欲求尺度) の分析結果を内集団の他者と比較したい程度によって測定した。いずれも回答は 5 段階尺度である。前者の 3 項目が準拠集団への関連づけを測定する主要な項目であり、それが妥当なものを測っているか否かを後者の項目との相関関係によって同時に検討する。なぜなら準拠集団の定義にあるように、準拠集団としてみ

なされている程、自己を評価する際の比較対象として求められると考えられるからである。人格テストの分析結果を他者と比較することは、自己を評価する際の手がかりに用いられると思われ、準拠集団への関連づけの測定が妥当であるかを検討する一つの目安になると思われる。

さらに、家族または大学の友人のそれぞれについて、内集団での課題の共有程度について測定した。具体的には「……では皆で一緒にやる仕事がある」「……では全員で共有する具体的な目標がある」「……では皆で一体となって行動する事が多い」「……では、みんなでどれだけのことがやれたのか結果が出る」の 4 項目である。回答は 5 段階尺度である。

最後に、家族または大学の友人のそれぞれについて、「みんなでやった事(やっている事)」のなかで最も重要なもの一つを選び、その内容をできるだけ具体的に記述させた。重要なものが無い場合には空欄のままでも良いとして、その判断は各被調査者に任せた。この質問は、他者とともに課題を共有することで環境への具体的な働きかけを経験しているかを問うものであるが、あらゆるみんなでやった事(やっている事)が自己認識欲求の充足に関わると思われぬ。そこで得られる客観的眞実性が自己にとって十分意味のあるものかどうかは、実際には社会的な多数の要因によって影響を受けていると考えられ、その過程は今回の調査の検討課題にはしていないところである。今回の調査では、客観的眞実性が客観的足る、つまり第三者に対しても自己に関するものとして表すことができるような内容だけを抽出する必要がある。従ってその測定では、質問紙に記述する事項を自己選択させることで、自己にとってその内容が社会的に呈示するだけの意味があり、社会的に自己を認識する際に足りる客観的眞実性が抽出できると考えた。これは被調査者にとって、質問紙への記述が調査者との一種のコミュニケーションとしての意味をもつとの考え (続・織田・鈴木, 1971) に基づいている。

## 結 果

まず自己認識欲求尺度の項目分析を行った。上瀬 (1992) によれば自己認識欲求尺度の 14 項目は 1 つの概念を測るものとして 1 因子構造を仮定して作成されているが、その内容を概観したところ、自己を含む内集団についての認識欲求を問う項目が混在しているように思われる。これは社会的アイデンティティの基盤となるもの

Table 1 自己認識欲求の因子分析結果(バリマックス回転後)

項目	第1因子	第2因子	共通性
3 自分の異性とのつき合い方は進んでいるのか遅れているのか知りたい.	.633	-.352	.259
4 自分には責任感があるのかを知りたい	.628	-.343	.333
6 自分は異性とうまくつき合っているのかどうか知りたい.	.606	-.353	.524
13 他の人がどんな物にどのくらいお金を使っているのか知りたい.	.582	.038	.512
7 自分の性的魅力がどのくらいあるのか知りたい	.570	-.382	.247
9 自分がどのくらい自分に対して厳しいのか知りたい.	.569	-.111	.492
14 自分に合った生き方を教えてほしい.	.555	.234	.471
10 自分の社交的な能力がどのくらいあるのか知りたい.	.534	-.450	.520
1 自分の知識は人に比べて多いのか少ないのか知りたい.	.506	-.055	.336
2 客観的に見て自分の容貌にはどの程度の魅力があるのか知りたい.	.501	-.286	.488
5 他の人と比べて、自分の知的能力はどのくらいあるのか知りたい.	.466	-.170	.755
11 自分の出身高校の評判は、今どうなのか知りたい.	-.011	-.869	.778
12 自分の大学は世間でどう評価されているのか知りたい.	.177	-.864	.340
8 自分の家庭の経済的地位は、どのくらいにあるのか知りたい.	.398	-.602	.363
寄与率	.261	.197	

として、一個人としての自己の認識からなる個人的アイデンティティとはこれまで区別して議論されることが多かった(J. C. Turner, 1982)。そこで今回は自己認識欲求尺度がそのような視点で下位尺度に区分することが可能であるか、その因子構造についても検討を行った。

因子分析を行った結果、1因子解では寄与率が.35と低く、2因子解の場合、前述したような内集団、内集団全体の評価を他と比べる事についての項目が第2因子に集まり、因子の解釈も明確であった。第2因子を構成する3項目の内容は、「家庭の経済的地位」「出身高校の評判」「大学の世間での評価」についての欲求を測るものであり、いずれも一個人の評価というよりも、自己が含まれる内集団、社会的カテゴリー全体の評価に関するものである。回転後の寄与率、因子負荷量は項目内容と伴にTable 1に示している。すべての項目はいずれかの因子に.45以上因子負荷量を持ち因子への所属は明瞭であった。そこで第1因子を「個人的自己認識欲求」因子、第2因子を「社会的自己認識欲求」因子とよぶことにする。ただし、第2因子を構成する3項目の因子負荷量はいずれも負の値であるから、実際には社会的自己認識を求めない程度を表すものである。しかし、以下の分析と考察時の意味的な混乱を避けるために、これ以降では得点化の際に正負を逆転して社会的自己認識を求める程度として算出し、それぞれの準拠集団との関わりを検討することにする。

それぞれの因子に含まれる項目の得点を合計し平均値を算出したところ、個人的自己認識欲求得点ではM=3

8.17, SD=6.93、社会的自己認識欲求得点ではM=7.93, SD=2.64であった。

次に、準拠集団への関連づけを測る尺度を項目分析した。3項目のそれぞれについて他の2項目の合計との相関係数を算出したところ、 $r=.35$  ( $p<.01$ )以上でいずれも有意であった。また3項目が1因子構造であることを仮定して因子分析したところ、因子負荷量はいずれも.63以上、寄与率は.64であった。これらのことから3項目は1つの尺度として扱うことが可能だと考え、以降では3項目を合計して準拠集団への関連づけの得点とする。この合計得点と、自己認識欲求尺度の分析結果を比較したい程度との関連を検討したところ、有意な正の相関関係にあった(家族: $r=.32$ ,  $p<.01$ ; 大学の友人: $r=.25$ ,  $p<.05$ )。準拠集団への関連づけの程度と社会的比較の対象として選択する欲求との間に予測通り正の関係があった。これは測定している内容の妥当性にも支持を与える結果だと思われる。また準拠集団への関連づけの得点を集団ごとに比較すると、まず、家族の方が大学の友人よりも高かった者が69名中50名であり、同点であった者が9名、大学の友人の方が高かった者が10名であった。集団別に平均値を算出したところ家族ではM=11.71, SD=2.31、大学の友人ではM=9.94, SD=2.31であり、家族の方が有意に高い値であった( $t(68)=6.18$ ,  $p<.01$ )。今回の調査対象者では家族の方が準拠集団としてより重要であったことが示唆される。

さらに、内集団での課題の共有を測る尺度を項目分析した。4項目のそれぞれについて他の3項目の合計との

相関係数を算出したところ、 $r = .55$  ( $p < .01$ ) 以上でいずれも有意であった。また4項目が1因子構造であることを仮定して因子分析したところ、因子負荷量はいずれも.79以上、寄与率は.67であった。これらのことから4項目は1つの尺度として扱うことが可能だと考え、以降では4項目を合計して課題の共有程度の得点とする。

共有課題についての自由記述では、家族については調査対象者の59%である41名が記述し、大学の友人については57%である39名が記述していた。共有課題の記述の有無と課題の共有程度とが正の関係にあるかどうかを検討した。家族との課題の共有程度は、記述有り群では  $M = 12.05$ ,  $SD = 3.99$ , 記述無し群では  $M = 10.36$ ,  $SD = 3.97$  であり、大学の友人との課題の共有程度は、記述有り群では  $M = 11.10$ ,  $SD = 3.58$ , 記述無し群では  $M = 9.90$ ,  $SD = 3.18$  であった。これらの平均値を  $t$ -test した結果、有意な差はみられなかった(家族:  $t(67) = 1.71$ ,  $n. s.$ ; 大学の友人:  $t(67) = 1.43$ ,  $n. s.$ )。課題の共有程度が高いからといって必ずしも第三者に対して共有課題を呈示するとは限らないのである。これらは別個の変数として扱い、以降では自己認識欲求との関連を別々に検討する。

今回の1つめの検討課題について、準抛集團への関連づけの程度が自己認識欲求と相関関係にあるかを検討した。準抛集團への関連づけの程度と自己認識欲求との相関係数を集団別に算出したところ、家族への関連づけの程度とは個人的自己認識欲求 ( $r = .22$ ,  $n. s.$ ) と社会的自己認識欲求 ( $r = .20$ ,  $n. s.$ ) とも有意な相関関係はみられず、一方、大学の友人への関連づけの程度とは個人的自己認識欲求 ( $r = .32$ ,  $p < .01$ ) と社会的自己認識欲求 ( $r = .46$ ,  $p < .01$ ) とに有意な正の相関関係がみられた。

今回の2つ目の検討課題について、集団内で課題を共有することが自己認識欲求を低減するかについて次に検討した。共有課題の4項目の合算値と自己認識欲求との相関係数を集団別に算出したところ、家族での課題の共有程度とは個人的自己認識欲求 ( $r = -.06$ ,  $n. s.$ ) と社会的自己認識欲求 ( $r = .13$ ,  $n. s.$ ) とも有意な相関関係はみられず、一方、大学の友人との課題の共有程度とは、個人的自己認識欲求 ( $r = -.02$ ,  $n. s.$ ) との間には相関関係がみられなかったが、社会的自己認識欲求 ( $r = .27$ ,  $p < .05$ ) との間に有意な正の相関関係がみられた。

次に、家族との共有課題の記述の有無を級間要因とし、

自己認識欲求の下位尺度(個人的自己認識欲求得点と社会的自己認識欲求)の区別を級内要因とした2要因の分散分析を行った。その結果、厳密には有意とはいえないが記述の有無の主効果 ( $F(1, 67) = 3.72$ ,  $p = .058$ ) と有意な交互作用 ( $F(1, 67) = 4.33$ ,  $p < .05$ ) がみられた。単純主効果の検定を試みたところ、個人的自己認識欲求に対する記述の有無の効果がみられ ( $F(1, 134) = 7.68$ ,  $p < .01$ )、社会的自己認識欲求に対する効果はみられなかった ( $F(1, 134) = 0.15$ ,  $n. s.$ )。つまり家族との共有課題を記述した者は記述しなかった者よりも個人的自己認識欲求が低かった(記述有り:  $M = 36.76$ ,  $SD = 7.26$ ; 記述無し:  $M = 40.25$ ,  $SD = 5.95$ )。また補足的分析として、記述された共有課題の内容を考慮して自己認識欲求との関連を検討した。記述者41名の中で21名の記述内容は明らかに家事に関する内容と分類できるものであった。分類の基準は「家事」「掃除」「洗濯」などの明確に家事を意味する文字を含む場合と、家業の内容(例えば「農業」や「会社経営」など)とその分担が明記されている場合を含めた。家事以外の内容とは、例えば家族旅行についてや自宅でのパーティーについてなどであった。家事に関する内容を記述した者の自己認識欲求の平均値は、個人的自己認識欲求では  $M = 35.05$ ,  $SD = 6.36$ , 社会的自己認識欲求では  $M = 7.63$ ,  $SD = 2.78$  であった。家事の記述の有無と自己認識欲求との関連を検討するため、家事記述の有無を級間要因とし自己認識欲求の下位尺度を級内要因とした2要因の分散分析を行った。その結果、家事記述の有無の主効果 ( $F(1, 67) = 5.14$ ,  $p < .05$ ) と交互作用 ( $F(1, 67) = 7.15$ ,  $p < .01$ ) がみられた。単純主効果の検定の結果、個人的自己認識欲求に対する家事記述の有無の効果がみられ ( $F(1, 134) = 11.46$ ,  $p < .01$ )、社会的自己認識欲求尺度に対してはみられなかった ( $F(1, 134) = 0.11$ ,  $n. s.$ )。特に家事に関する記述をした者は記述しなかった者よりも個人的自己認識欲求が明らかに低かったといえる。

次に大学の友人との共有課題の記述の有無を級間要因とし、自己認識欲求の下位尺度の区別を級内要因とした分散分析を行った。その結果、有意とはいえないが交互作用にのみ傾向差があった ( $F(1, 67) = 3.64$ ,  $p = .061$ )。単純主効果の検定を試みたところ、個人的自己認識欲求に対する記述の有無の弱い効果があり ( $F(1, 134) =$

3.81,  $p < .10$ ), 社会的自己認識欲求に対してはみられなかった ( $F(1, 134) = 0.05$ , n. s.). 大学の友人との共有課題を記述した者は記述しなかった者よりも個人的自己認識欲求が低い傾向にあった。大学の友人との共有課題はその内容が多岐にわたり、概観したところでは多数の者が共通して記述する課題は見い出せず、また、適切な分類基準を導く仮説は今回たてていないのでこれ以上の内容分析は行っていない。

さらに、共有課題の記述の有無によって調査対象者を分けたいうで、準拠集団への関連づけの程度と自己認識欲求との相関係数を算出した (Table 2)。その結果、家族との共有課題を記述した者だけが2つの変数間の相

Table 2  
共有課題の記述の有無にみた準拠集団への同一化程度と自己認識欲求との相関係数

	個人的自己 認識欲求	社会的自己 認識欲求
家族との 共有課題の記述有り	.15	.03
記述無し	.48 **	.48 **
大学の友人との 共有課題の記述有り	.36 *	.36 *
記述無し	.32 *	.64 **

\*  $p < .05$   
\*\*  $p < .01$

関関係がみられなかった。その他はいずれも準拠集団への関連づけの程度が高い程、自己認識欲求が高いという正の相関関係がみられた。前述の分析で明らかのように家族には相対的に強く自己を関連づけており、その様な家族集団において今回のような質問紙に記述する程の意味をもつ共有課題をもっている者は、家族への準拠の程度が高まって自己認識欲求はそれに共変しないのである。

## 考 察

今回の調査では上瀬(1992)が作成した自己認識欲求尺度の因子構造を再検討し、その結果から尺度を2因子に分けて得点化し、他の変数との関連を検討した。個人的自己認識欲求と社会的自己認識欲求とが、準拠集団への関連づけの程度や共有課題の有無などの変数からそれぞれ異なった影響を受けていたことを解釈するには、まず以下のようなことを考慮する必要があるだろう。

自己認識の内容を分類する方法として、個人間の比較によって認識されるものと集団間の比較によって認識されるものとに分けることができる。例えば Thoits & Virshup (1997) は、自己が記述される際の現象的側面からの区別として、ユニークで詳細な伝記的特徴や特有の経験などに基づく自己記述が個人的アイデンティティ (personal identity) であり、社会的に構成された意味のある社会的カテゴリーであり、同時にそれが “Who am I?” や “Who are we?” という質問への答えにもなり得るのが社会的アイデンティティ (social identity) であると説明している。また、その区別と現象的には対応するものと思われるが、Brewer & Gardner (1996) は自己の社会的側面の発生過程を考慮して2つの次元に分けている。その内、二者関係や集団内の成員との関係からもたらされるものを個人間アイデンティティ (interpersonal identity) とし、社会的カテゴリーなどへの同一化による非個人的なつながりからもたらされるものを集合的アイデンティティ (collective identity) とよんでいる。自己がある一つの集団に含まれることは、これら2つの側面の両方を得ることになり、それぞれが自己認識に対し別々に機能すると考えられている。例えば Felson & Reed (1986) は、集団の遂行が向上することは、判断基準が高まることで自己の評価が相対的に低まるという比較の効果がある一方で、集団の遂行が自己の評価に反映し、結果として自己の評価をも高めることがあると指摘している。また Brewer & Weber (1994) の実験では、被験者を集団に所属させた後、個別にドット数を数える課題を行わせている。その後、呈示する他者の成績と所属集団を操作したところ、内集団の好成績が自己評価に負の影響を与える対比の効果と、正の影響を与える同化の効果は操作に対応して生じていた。これらの効果は、自己を内集団に関連づけることでともに生じる可能性をもつ。つまり準拠集団への関連づけが高まることで、集団内で生じた判断基準に自己を照らし合わせることも、自己を含む内集団全体の評価を外集団と比較することも可能になると思われる。

今回の結果で大学の友人集団への関連づけの程度が個人的、社会的自己認識欲求の両方に正の影響を与えたことは、上で述べたように、2つの側面において様々な次元での比較が可能になることから、自己認識欲求が喚起された為だと思われる。また、重要な準拠集団である家族内で、第三者にも呈示した共有課題をもつ者では、準

拠集団への関連づけの程度と自己認識欲求との間に相関関係がみられなかった。そのことから、重要な他者との間で意味のある課題が共有されない限りは、単に自己を準拠集団に関連づけることは、むしろ自己認識欲求を喚起させる可能性をもつといえる。

一方、集団内で課題を共有している程度と自己認識欲求とに有意な負の相関関係は見い出せなかった。課題の共有程度の測定では、その課題遂行が自己にとってどの程度重要であり、自己認識に貢献しているかが不明であり、自己認識欲求の充足には単なる課題の共有以上の条件が必要であることが示唆される。さらに、大学の友人との課題の共有は社会的自己認識欲求とむしろ正の相関関係にあった。この結果は、課題の共有によって内集団全体と自己との関連づけ、同一化の程度が強まり、外集団との比較が自己の評価にも関わる可能性を持ち始めた為とも考えられるが、集団によって異なった影響が現れる理由については今回の調査では不明である。

家族との共有課題の内容を質問紙に記述することは個人的自己認識欲求と負の関係にあった。単なる課題の共有程度とは関連がみられなかったにも関わらず、自由選択的な記述の有無とに関連がみられたのは、第三者に対して呈示する程の意味をもつ課題であることが、自己認識欲求の充足に貢献した為だと推察できる。今回の調査で、記述された共有課題の中で個人的自己認識欲求に影響していた内容には家事の分担などが多かった。このような課題では集団内での個人的な属性や能力などの評価を正確にさせたと思われる。もし共有される課題が他の集団に対して働きかけるものであれば、そのような集団間関係の中で内集団全体の評価などが認識されるであろう。従ってその場合には社会的自己認識欲求の低減に貢献すると思われる。

### 社会的真実性と客観的真実性との関係

準拠集団の成員との比較から直接的に自己認識を得るという手段が社会的真実性を基盤とするのに対して、課題を遂行することによる環境との相互作用からは客観的真実性を基盤として自己認識に関連する。ところでこのような自己認識過程の2つの手段について、Festinger (1950, 1954) と Newcomb (1960, 永田訳, 1969) とではその意味づけが異なっている。Festinger (1950, 1954) によれば、自己の妥当性の基盤の一つとなる社会的真実性とは、客観的真実性が得られない場合の単なる

代わりである。まず環境の中に適応すべき状況、遂行すべき課題が存在し、そのために本来は客観的真実性に基づく評価が必要となる。しかしそれは必ずしも得られるわけではないため、評価すべき次元の妥当性を代わりの社会的真実性によって求めるとされる。それに対し Newcomb (1960, 永田訳, 1969) は、他者と共有した環境を正確に評価し、そこでの交渉において、より多くの報酬を受け取るという目的から個人に対して働く力を「実在—指向的 (reality-oriented) な力」とよび、一方、共通の対象に対する自己の評価に支持を見出そうとする「自閉的 (autistic) な力」の存在を別個に仮定している。自閉的な力とは、我々が自己自身を含む環境についての情報提供者として他者に依存しているということ、つまり環境に対する自己自身の評価が常に直接的な感覚的経験によって確かめられるとは限らず、たとえ可能であっても他者からの支持によって一層満足を得ることなどの理由から発生した独立した動機である。自閉的な力によって、人は自己の評価に対して他者からの支持を得よう欲するとされる。前者の実在—指向的な力とは、環境への働きかけという目的に対応するものであり、後者の自閉的な力は、他者と類似することで得られる社会的真実性を基盤とした妥当性を得ようとする動機に対応するものと思われる。Newcomb (1960, 永田訳, 1969) の考えが Festinger (1950, 1954) と異なる点は、他者との類似によって自己の妥当性を認識しようとする力を、環境への働きかけに向かう力から独立した存在として捉えている点である。

Festinger (1950, 1954) の考えによれば、もし重要な課題が存在しない場合には、自己を評価すべき次元が特定されないことになり、たとえ準拠集団が存在してもそこで客観的真実性や社会的真実性を求める必要はなく、自己認識欲求も高まらないことになるだろう。それは社会的真実性が単に課題遂行のための手段として考えた場合である。Newcomb (1960, 永田訳, 1969) の考えによれば、独立した自閉的な力が存在しているため、重要な課題が存在しない場合にも、準拠集団内で他者との比較から社会的真実性を求めようとするだろう。その際、重要な課題が存在しないが故に、どの次元で比較すべきか明確にならないまま欲求だけが高まった状態になると思われる。今回の調査結果は、準拠集団内で共有されている課題を記述した者はそうでない者よりも個人的自己認識欲求が低く、また課題を記述しなかった者は特に、

## 引用文献

準拠集団への関連づけが高まる程自己認識欲求も高いという傾向であった。これは、重要な課題が存在しない場合にも、社会的真实性を得ようとする欲求が独立して存在するために、準拠集団が提供する様々な基準での比較の欲求が高まった為ではないだろうか。この点では Newcomb (1960) の独立した自閉的な力の存在を支持する結果だといえよう。

また上記の結果は内集団の種類によって程度の違いがあった。まず家族集団の方が大学の友人集団よりも準拠集団としての関連づけの程度が高く、その違いが自己認識欲求への充足や喚起への影響にも現れていたと思われる。具体的には、家族での共有課題を記述したことは個人的自己認識欲求に対して有意な効果がみられたが、大学の友人との共有課題を記述することからの効果には明確な有意性はみられなかったこと、また、家族との共有課題を記述した者だけが、準拠集団への関連づけの程度と自己認識欲求との間の相関関係が有意でなかったことである。準拠集団として重要度の高い家族の成員が、自己にとっての重要な他者であり、自己認識に多大な影響を与えていたと思われる。その集団において重要な課題を共有し遂行することによって客観的的真实性を得ていたからこそ、自己認識欲求の充足に貢献したのであろう。

## 今後の課題

さらに、準拠集団への関連づけによって自己認識欲求が高まる一方で、重要な課題を共有し客観的的真实性を得ることでその欲求が充足されるとすれば、自己認識欲求を低減させるために課題を自発的に創出する方略がとられることにならないだろうか。Festinger (1954) は自己を評価するための比較対象は、何らかの次元において相対的に自己に近い者が選択され、そのことが他者との親和を導くと仮定している。内集団への関連づけが準拠集団としての成立を意味するのであれば、その段階で自己認識欲求は喚起され、現実の環境に関連性をもった客観的的真实性を得るために何らかの共有課題を生成しようとするかもしれない。このように自己認識過程を2種の真实性統合への過程として扱うことで、集団の課題生成過程を自己認識の観点からとらえることも可能になるだろう。

- Alexander, C. N. & Knight, G. 1971 Situated identities and social psychological experimentation. *Sociometry*, 34, 65-82.
- Baumeister, R. F. 1986 *Identity: Cultural Change and the Struggle for Self*. New York: Oxford University Press.
- Brewer, M. B. & Weber, J. G. 1994 Self-evaluation effects of interpersonal versus intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 268-275.
- Brewer, M. B. & Gardner, W. 1996 Who is this "We"? Levels of collective identity and self representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 83-93.
- Burke, P. J. 1980 The self: Measurement requirements from an interactionist perspective. *Social Psychology Quarterly*, 43, 18-29.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle. *Psychological Issues*, 1, 1-171. (小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 — アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Felson, R. B. & Reed, M. D. 1986 Reference groups and self-appraisals of academic ability and performance. *Social Psychology Quarterly*, 49, 103-109.
- Festinger, L. 1950 Informal social communication. *Psychological Review*, 57, 271-282.
- Festinger, L. 1954 A Theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- 船津衛 1975 準拠集団論 富永健一・塩原勉(Eds.) 社会学原論 有斐閣
- 上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究 — 女子青年を対象として — 心理学研究 63, 30-37.
- Markus, H. & Kunda, Z. 1986 Stability and malleability of self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 858-866.
- McCall, G. J. 1987 The Structure, content, and dynamics of self: Continuities in the study



- of role-identities, In K. Yardley & T. Honess (Eds.), *Self and Identity: Psychosocial Perspectives*. Great Britain: John Wiley & Sons.
- Mead, G.H. 1913 The social self. *The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific methods*, 10, 374-380. (船津衛・徳川直人(訳) 1991 社会的自我 恒星社厚生閣)
- Mead, G.H. 1934 *Mind, Self, and Society; From the Standpoint of a Social Behaviorist*. C. W. Morris(Ed.). Chicago: The University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収(訳) 1974 精神・自我・社会 青木書店)
- Newcomb, T.M. 1960 Varieties of interpersonal attraction. In D. Cartwright & A. Zander (Eds.) 1960 *Group Dynamics: Research and Theory*, 2nd ed., New York: Row, Peterson. (三隅二不二・佐々木薫(訳編) 1969 グループ・ダイナミックス 誠信書房)
- 大西仁・鈴木宏昭・繁樹算男 1993 状況に敏感な類似性判断のモデル 心理学評論 36, 633-649.
- Sherif, M. & Sherif, C. W. 1969 *Social Psychology*. New York: Harper and Row.
- Stone, G. P. 1962 Appearance and the Self. In A. M. Rose(Ed.) *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Swann, W.B. & Predmore, S. C. 1985 Intimates as agents of social support: Sources of consolation or despair? *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1609-1617.
- Tesser, A. & Campbell, J. 1982 Self-evaluation maintenance and the perception of friends and strangers. *Journal of Personality*, 50, 261-279.
- Thoits, P. A. & Virshup, L. K. 1997 Me's and We's: Forms and functions of social identities, In R. D. Ashmore & L. Jussim(Eds.) *Self and Identity: Fundamental Issues*. New York: Oxford University Press.
- 続 有恒・織田揮準・鈴木真雄 1971 質問形式による性格診断の方法論的吟味Ⅱ—Y G性格検査の洗練の試み— 教育心理学研究, 19, 21-33.
- Turner, J. C. 1982 Towards a cognitive redefinition of the social group, In H. Tajfel(Ed.) *Social Identity and Intergroup Relations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Turner, R. H. 1968 The Self-conception in social interaction. In C. Gordon and K. J. Gergen (Eds.) *The Self in Social Interaction*. NY: John Wiley & Sons, Inc.
- Turner, R.H. 1978 The Role and the person. *American Journal of Sociology*, 84, 1-23.